

「夕霧」巻の紫上の述懐をめぐって

——源氏物語・紫式部日記の女性観との関連——

河内山 清彦

女の身は、みな、同じ、罪深きもとゐぞかし。

「若菜下」巻

一

「夕霧」巻の紫上の述懐についてはかつて詳述したことがある^①。本稿では、その要点を示しつつ、源氏物語ならびに紫式部日記にちりばめられた種々の女性論ないしは女性観とそれとの関連に検討を加え、あらためて紫上の思念の真意を闡明しようと思う。

問題の述懐は、

①女ばかり、身をもてなすさまも、所せう、あはれなるべきものはなし。②物のあはれ、をりをかしき事をも、見しらぬさまに引き入り、沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしさも、常なき世のつれづれをも、なぐさむべきぞは。③おほかた、物の心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほし立てけん親

も、いと、口惜しかるべき物にはあらずや。④心にのみこめて、無言太子とか、法師ばらの悲しき事にする、昔の譬ひのやうに、あしき事、よき事を、思ひ知りながら、うづもれなんも、いふかひなし。⑤わが心ながら、よき程には、いかで保つべきぞと、⑥おぼしめぐらすも、今はただ、女一の宮の御ためなり。

(四—一四二・一四三)

と叙述されるところのものであるが、これに関する戦後この方の一般的な解釈は、女が時代と社会の中で本然の姿をゆがめて生きること余儀なくされていることへの強い抗議^②。男性の身勝手な好色の対象として常に被害者であり、崇高に身を持そうとするつつましやかな意志表示をあえなく踏みにじられて、多妻制下の愛欲争闘の世界にひきずり込まれてしまい、場合によっては、世人の批難をも甘受しなければならない女性一般のありように対する嘆^③。女が女であることのために、人間として自主的に生きる術を奪われていることに強く抗議する、が抗議したとてどうなるものでもないことに呻くがごとき物語の作者紫式部の深沈たる思念等々である。

なんでもかでも時代や社会のせいに歸し、けっして個人の責任を問うことをしないのが正当な批判精神であり、弱きを助け強きを挫くで弱者や被抑圧者にむやみやたらに感傷的同情を示すことが社会正義であると安易に心得る風潮の強い現今の日本社会においては、これらはまさしく俗耳に入りやすい考説なのであらう。

しかしながら、紫上の述べは、女の「身をもてなすさま」^①身の処し方をめぐって展開していて、⑤に見られるとおり理知を越える「心」の認識から中庸を保つことの困難さに思いつたものである。したがって、もしそれが先に掲げたごとき当時の女性のおかれた悲惨な状況への抗議などであるのなら、なにゆえ結論的に微妙な「心」の問題をとりあげ、中庸の重要さに言及したのか説明がつかないであらう。

また、そのような時流世潮に阿付した通説によると、②③④は、本然の姿をゆがめて生きること余儀なくされ、人間として自主的に生きる術を奪われた平安時代女性一般の具体的形姿ということになるわけだが、源氏物語に描

き出された具体的な女性像をみても、その種の女はほとんど存在せず、ある程度該当すると言えるのは末摘花か女三宮くらいで、物語世界でも彼女等はむしろ特殊で例外的な否定的人物として極端に形象されたきらいがある。

そもそも平安時代においては貴族女性の教育では、書道・音楽・和歌を必須教養に、その他種々の知識と感情を生かした自己表現に役立つ素養の修得が重要視されたのであり、そのような教育基盤があつてはじめて他の時代にあまり類例をみないいわゆる女流文学が豊かに絢爛と花開いたことに想到しなければならぬであろう。この厳然たる歴史的事実は、甘やかな感傷と偽善の涙でくもつた眼で幻視される被抑圧者としてのみの「女性一般のありよう」とは大きく齟齬する。すなわち、平安朝女性は一般的に、「物のあはれ、をりをかしき事をも見しらぬさまに引き入り、沈みなど」してつましやかな意志表示をあえなく陥みにじられていたのではない。「おほかた、物の心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむ」ことを余儀なくされていたわけでもない。「あしき事、よき事を、思ひ知りながら、うづもれ」た状態に追いやられ、人間として自主的に生きる術を奪われてはいなかった。平安の「時代と社会」は女性がそのようになることを期待もしなければ、ましてや強制などしなかった。むしろそれら③④に示された女性の様態は「時代と社会」がもっとも忌避した悪しき典型に属するのを知らねばならないであろう。

そして、かりに紫式部が、そうした女性一般のおかれた惨苦の状況に対する批判や抗議の念を抱懷しているのなら、女性の自立・自己解放・積極的な活動を是認し奨励するはずであるのに、源氏物語でも紫式部日記においても彼女がしきりに示唆するのは女が女の分際をわきまえて自己を制御し慎み深く謙虚に身を処すことであるのだ。この点については、後にも詳述するけれども、たとえば、「物のあはれ知りすぐし、はかなきついで的情あり、をかしきに進める方、なくてもよかるべし」(「帚木」一一六四)、「すべて、女の、物づつみせず、心のままに物のあはれも知り顔つくり、をかしきことをも見知らんなん、そのつもり、味気なかるべきを」(「胡蝶」二四〇四)、「かく

人に異ならむとおもひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみ待るは。艶になりぬる人は、いとすござずなるをりも、ものあはれにすすみ、をかしき事も見すぐさぬほどに、おのづから、さるまじく、あだなるさまにもなるに待るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく待らむ」(紫式部日記、清少納言評)などの評言によって明らかなごとく、女が「物のあはれ」を十分に理解して、「をかしき事」を見逃さないように自主的に振舞うことに対して冷水をあびせかけるような批判をくりかえしている。もし紫式部が、平安朝の一般女性が「物のあはれ、をりをかしき事をも、見しらぬさまに引き入り、沈みなど」する状態に置かれていると認識して、そうした無慚なありようを強いる時代と社会に対する抗議の念を心中深く蔵していたなら、「物のあはれにすすみ、をかしき事をも見すぐさぬ」生き方を積極的に支持し賞揚しこそすれ、それを非難したり、自己抑制の必要性など強調したりするわけがないのだ。

女が女であることの分際を自覚して守り踏みはずしてはならないとする自己規制の主張は、「帚木」巻雨夜の品定め終わり近くの個所に、

真字を走り書きて、さるまじきどちの(『ソナナ事ヲシテハイケナイ女同士ノ) 女文に、なかば過ぎて書きすくめたる、あなうたて、この人の、たをやかならましかばと見えたり。

(一一八五)

とあるによつても窺い知れるが、これは紫式部日記の清少納言評における「さばかりさかしだち、真名書き散らして待るほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり」とも関連があり、紫式部は男によつて作られたであろう女としての規範を遵守する立場とほとんど径庭がないと言える。そして、雨夜の品定めは次に掲げる左馬頭が女の自己制御の必要を説くことばで締めくくられている。

(女ハ) 万の事に、などかは、さてもとおぼゆる折から、時々、思ひわかぬばかりの心にては、よしばみ、情だたざらんなん、目やすかるべき。すべて、心に知れらんことをも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむ

ことをも、一つ二つのふしは、過ぐすべくなくあべかりける。

(一一八六)

二

「夕霧」巻の紫上の想念は、女が女であることの無慚さを際立たせる理不尽な現実社会への強い抗議などではけっしてない。それは、かねがね光源氏から女一官を託され、その内部に、「後めたかるまじき心ばせ」(四〇二)を形成することを要請されていた紫上が、夕霧と落葉宮の事件に関連して、光源氏より、「かうやうのためしを聞くにつけても、亡からむ後、うしろめたう思ひ聞ゆるさま」(四一—四三)を打ち明けられて、自分一身のためではなく、「女一の宮の御ため」になされた、女の「身をもてなすさま」に関する適切な考察である。

もともと消極的受動的傾向にある女性性は、過度の自己抑制によって、②③④の具体例に示されたような、「引き入り、沈み」「物の心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむ」「うづもれなん」という結果におちいってしまう。紫上は女がそうなることに「あはれなるべき」と深い同情を寄せつつも、「口惜し」「いふかひなし」と批判を加え、「わが心がながらも、よき程には、いかで保つべきぞ」と、人間の心の御しがたさの認識を前提にして、中正適度を保ち得る柔軟強靱な精神力の涵養に思いをめぐらしたのである。

これが、雨夜の品定めにはじまる作者紫式部の女性論の根幹に関わる思想であり、紫式部日記に散見する女性観と通底する点について、これまでも具体例を挙げ触れてきたけれども、「夕霧」巻の場合とほとんど吻合するような状況において、内容的にもきわめて緊密な女性論が、「螢」巻でも展開されているので、その相関の様相に論析をほどこし、さらに、冒頭で述べたように、その他の源氏物語・紫式部日記に表出された女性論と「夕霧」巻の紫上のそれとの関係についてできるだけ幅広く考察を加えていくことにする。

「螢」巻には、五月雨の頃、絵物語に熱中している六条院の女性たちを相手に、光源氏が物語談義をする個所がある。

玉鬘のもとでは、「(物語ハ) 神世より世にある事を、記し置きけるなり。日本紀などは、ただ、片そぼぞかし。これらにこそ、道々しく、くはしき事はあらめ」(二四三二) にはじまる著名な物語論を開陳し、それを契機に玉鬘に言い寄ったりして、また、紫上のところでは、明石姫君の万全なる教育のため、「世馴れたる物語」(二四三五) や「継母の腹ぎたなき昔物語」(二四三六) を読ませないように注意する。こうした養女と実の娘とに対する扱い方・接し方の相違にも、光源氏が、「複雑かつ多面的で、しかも相拮抗する役割と責任とを荷いながら、ふてぶてしく生きていく」、「二律背反をも現実的に処理する成熟した生活人」の相貌を顕著に示しはじめたのがうかがえると、以前に指摘したことがある。言いかえれば、それは作者の成熟でもあり、物語論はその地点に立脚して展開していると言えるが、この「螢」巻にあらわされた女性論ないしは女性教育論も同様に考えられる見解として注意が払われる。源氏が明石姫君養育のため悪書の追放を主張した部分に、次のような紫上との対話がある。

うへ、「①心あさげなる人まねどもは、見るにも、かたはら痛くこそ。宇津保の藤原の君の女こそ、いと、おもしろかに、はかばかしき人にて、あやまちなかめれど、すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しき所なかめるぞ、一様なめる」とのたまへば、「②うつつの人も、さぞあるべかめる。人々しく、たてたるおもむき異にて、よきほどに構へぬや。③よしなからぬ親の、心とどめて生ほしたてたる人の、子めかしきを、いつけるしるしにて、後れたる事おほかるは、なにわざしてかしづきしぞと、おやのしわざさへ思ひやらるこそ、いとほしけれ。げに、さいへど、その人のけはひよと見えたるは、かひあり、おもだたしかし。④こと葉のかぎり、ま

ばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたる事のなかに、げにと、見え聞ゆることなき、いと、見おとりするわざなり。すべて、よからぬ人に、いかで、人ほめさせじ」など、⑤ただ、この姫君の、点つかれ給ふまじくと、よろづに思しのたまふ。

(二一四三五・四三六)

省略や屈折の多い表現から成りたち、かなり難解な個所なので、日本古典文学大系本と日本古典全書本の頭注などを参照して、通釈しておくことにしよう。

紫上は、「①(物語の女の)浅はかな真似をするのは、はたで見えていても、いかにも困ったことです。しかし、宇津保物語の藤原の君の娘(貴宮)はたいそう冷静なしっかり者で、恋ゆえの失敗はないでしょうが、なまめかしい所もなく、求婚者たちに無愛想な返事をするのも、女らしいところがないのが欠点で、思慮浅薄な女と同様、よくありません」とおっしゃると、源氏は、「②現実の人間の場合も、その通りでしょう。自分の立てた考えに固執して、過不及なく柔軟にふるまえないのですよ。③そうとう立派な親が気をつけて育てあげた娘が、無邪気で子供っぽいのを、親としてはそれを愛育の成果として満足しても、他の面で足りないところが多いのは、どんな育て方をしたのであろうかと、親のしつけ方まで思いやられるのは、まったく気の毒でもあります。そうは言うものの、なるほど、さすがにその人らしいなあと、よく見られるのは、親も育てた甲斐があるし、名誉なことです。④まわりの者が口をきわめて、はたで聞いていても恥ずかしいと思うほど褒めたのに、その人の言動のなかに、なるほどと思えるところがないのは、かえって見劣りがすることになります。つまり、まらないうちに、どうしても娘を褒めさせたくないものです」などと、⑤もっぱら明石姫君が非難されないようにと、万事に心を配っておっしゃる。

この対話の内容についていささか説明をほどこせば、まず、紫上のことば①は、物語にあらわれる恋愛の具体相を示し、輕佻浮薄と冷静無愛想との一方にかたよった行動に対して、一挙に、「一様なめる」と否定的批判を加

えている。それをうけた源氏の述懐は、②③④と展開していくが、②では紫上の考えを現実にあてはめ、中庸と柔軟性の必要を説く。③は、その「よきほど」の体得の重要性を底に潜めながら、子女教育論へと転じている。つまり、せっかくの養育が過保護となり、かえって「子めかしき」発育不良の状態にしてしまふ弊害を指摘し、教育者としての親の責任を問題にする。さらに④では、仲人口のような過褒と具体的事実との差異がもたらす「見劣り」について言及したのであるけれど、以上の源氏の思考は、⑤けっきょく明石姫君養育のためであると説明されている。

四

この「螢」巻の会話における、とくに光源氏の述懐が、既述の「夕霧」巻における紫上のそれと共通するところが少なくないのに誰しも気づくことであろう。前者の傍線をほどこした章句は、それぞれ後者における「よき程には、いかで保つべきぞ」、「生ほし立てけん親も、いと口惜しかるべき」、「あはれなるべきものはなし」、「ただ、女一宮の御ためなり」と一致もしくは類似する発想表現であると言え、両者の女性論はきわめて密接な対応関係にあることがわかる。その状況と内容において共通し重層する事項をまとめると、

- (一) 光源氏と紫上の対座における、女性のあり方をめぐっての述懐である。
- (二) 紫上の養女（「螢」巻では光源氏の娘の明石姫君、「夕霧」巻ではその子の女一宮）に対する万全の教育を目的とする考察である。

(三) 女性の身の持し方につき、「よきほど」＝中庸と適応性の保持を要諦として、否定的な具体例を挙げ論を展開している。

(四) 親の熱心な育成にもかかわらず、失敗する例を掲げる。

㊦ 否定的に批判される女性に対して、一方では、「いとほしけれ」「あはれなるべきものはなし」と惻隱の情を寄せている。

このような密着性によって、「夕霧」巻の女性観は、「螢」巻の反復であり変奏であるといっても過言ではあるまい。そのモチーフの原型が「帚木」巻の雨夜の品定めに存するのは贅するまでもない。

したがって、「螢」巻の紫上と源氏の会話の内容が、女を抑圧する社会や時代に対する作者紫式部の忿懣や抗議ではないのと同様に、「夕霧」巻の紫上の思念は、その種の浅い批判意識から発せられたものではなく、女性が「身をもてなす」ことの困難さに思いをいたし、「よきほど」を保つべく心しなければならぬのを強調した周到な女性論であり教育論であるのだ。

「螢」巻における紫上と光源氏の対話の呼応によっても、両者の琴瑟相和す様子が十分にうかがえるけれど、「夕霧」巻では紫上がかつて源氏が主張したこととはほぼ同じような思考を展開させているのであって、この事実は、通説のように巻を追うにつれ紫上が源氏から乖離していくのではなく、むしろまったく逆にいよいよ紫上が源氏と一体化していくことを示すこよなき証左でもあると言えるであろう。

五

「螢」巻で紫上が宇津保物語の女主人公貴官の言動に「女しき所」が欠けているのを論難しているのは大いに注意に足る。すでに先学によって指摘されたように、玉鬘十帖は宇津保物語の貴官をめぐる求婚譚を踏まえて書かれている。⁹⁾ その範型とした作品の女主人公を、その十帖のなかで紫上をして批判させているのは、紫式部のしたたかな自信誇負のほどを示して興味深いのであるが、たしかに玉鬘十帖における女主人公玉鬘は、「すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しき所なかめる」といった、男たちの求愛に対して彼等の切なる心情を思いやることなく頑な

に拒絶するばかりの女ではなく、光源氏のよろしき指導のもとに、容易になびくでもなく、直ちに拒むでもなく、多くの男たちの関心をひきつなぎ、悩ませ続け、その結果、「あやしう、男・女につけつつ、人に物を思はする、かむの君(『玉鬘』にぞおはしける)(一五四)と草子地に記されるほどで、それゆえに、光源氏と実父内大臣(頭中将)から、「女の御はへには、この君をなむ、本(『手本』にすべき)(一一四)と賞讃される女性として造型されていることに関わるのであるけれども、また、貴官を批判した紫上その人が源氏物語では終始一貫、中庸と柔軟性の具現者として形象されていることにもよるのである。

したがって、もし紫上が、「若菜」以後において、女性哀史的発想論者が主張するように、光源氏の絶大な愛情に背を向け、男性に対する不信頼や社会と時代に対する抗議の念をわだかまらせた女であるのなら、それは貴宮以下の「女しき所」が欠け融通性に乏しく圭角の多い女であることになり、紫上はかつて自分が非難したタイプよりもっと処置しない女になりさがったことになる。もし紫上がそんな女であるのなら、女性に関する最高の鑑識家光源氏が、「去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく、つねに目馴れぬさまし給へるを、いかで、かくしもありけんとおぼす」(二六七・二六八)、「ただ、まことに心の癖なく、よきことは、このたい(『紫上』をのみな。これをぞ、おいらかなる人といふばかりけるとなん、思ひ侍る」(二九九)、「君(『紫上』こそは、さすがに、限なきにてはあらぬ物から、人により、事に従ひ、いとよく、二筋に、心づかひはし給ひけれ。更に、ここら見れど、御有様に似たる人は、なかりける」(三六二)等々と、ことあるごとに最大級の讃辞を与え続け、全身的に愛情を注ぐはずがないのだ。

六

紫上は貴宮に関して、「すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しき所なかめる」点に貶評をつきつけたのである

が、これによつて彼女が、「女しき所」の価値をきわめて重視しているのが判明する。そして、その「女しき所」の欠如といふことの具体的内実は、紫上に応じた源氏のことばによれば、「人々しく、たてたるおもむき異にて、よきほどに構へぬや」という状態を指すことになる。

女が一人前に自分自身の主義主張をうちたててそれに固執することに対する否定的な考えは、雨夜の品定め以来、源氏物語に一貫して表出されていて、とりわけ「玉鬘」巻で光源氏が明石姫君の教育に關し、「すべて、女は、たてて好める事まうけてしみぬるは、さまよからぬことなり」(二一三七四)と述べるのはその好個の例である。

紫式部日記における、「人々しく、たてたるおもむき異にて」という様態に対する批判的な考えは、清少納言を論評したなかの、「かく、人に異ならむとおもひこのめる人は、行末うたてのみ待るは」という呪咀のような非難攻撃をみても明らかであるけれども、

我はと、くすしくならひもち、けしきことごとしくなりぬる人は、起ち居につけてわれ用意せらるるほどに、その人には目とどまる。目をしとどめつればかならず、ものをいふ言葉の中にも、来て居るふるまひ起ちて行くしろでにも、かならず癖は見つけらるるわざに侍り。

と、自己を強く打ち出そうとする女性に対してはあたかも小姑のような皮肉なまなざしで、その一挙手一投足を観察し非を鳴らそうとしていることでもうかがい知れる。ましてや、自信たっぷり自己主張する女性については、

○いとこそ艶に、われのみ世にはものゆゑ知り心ふかき、たぐひはあらじ。すべて世の人は心も肝もなきやうにおもひて侍るべかめる。

○まづわれ賢しに、人をなきになし、世を議る程に、心の際のみこそ見えあらはるめれ。

○われかしこに思ひたる人、にくくもいとほしくもおぼえ侍るわざなり。

○ただ、わが心の立てつる筋をとらへて、人をば無きになすなめり。

などと、嫌惡の情をあらわにして諷刺的にあるいは惘然視して表現するのである。

源氏物語にも、それと同様な批評は、雨夜の品定めにおける、「我が心得たることばかりを、おのがじし心をやりて、人をば貶しめなど、かたはらいたき事、多かり」(一一五八)、「すべて、男も女も、わる者は、我が、わづかに知れる方のことを、残りなく見せ尽くさむと思へるこそ、いとほしけれ」(一一八五)をはじめとして頻出する。

紫式部は、女が誇らかに個性を發揚して學識才知を世に示して生きるという自主的な生き方に、必ずしも賛成ではないようだ。

七

すでに明らかなように、紫上が「女しき所」として、女性に不可欠な条件としたものは、「人々しく、たてたるおもむき異にて、よきほどに構へぬ」のとは對極をなすものである。源氏物語全編に徴するに、それは柔軟な精神を基盤におくものであるようだ。

光源氏が紫上を二条院を迎えとり、まず紫上に、「女は、心やはらかなるなむよき」(一一二二八)と教え聞かせたのを想起すべきであるが、この考えは、「宿木」巻で、匂宮が中君に箒の合奏をすすめ、

すべて女は、やはらかに、心美しきなむ、よき人とこそその中納言(『薫』)も定むめりしか (五一〇五)

と注意するなど、源氏物語に散見される。この作品で女性に求められているのは、女が自己を確立し主張していくといったことではなく、必要なのは柔和で従順で素直な性格であり、それをもって柔軟に置かれた状況に適應していく身の処し方である。そのことは「夕顔」巻における光源氏の女性観にも端的に示されている。

はかなびたるこそ、女はらうたけれ。かしこく、人に靡かぬ、いと、心づきなきわざなり。みづから、はかば

かしく、すくよかならぬ心ならひに、女は、ただ、やはらかに、取りはづして、人にあざむかれぬべきが、さすがに、ものづつみし、見ん人の心には、従はむなん、あはれにて、我が心のままに、とり直して見むに、なつかしくおぼゆべき。

(一—一六八・一六九)

ここで、女が頑なで、「かしこく、人に靡かぬ、いと、心づきなきわざなり」と否定的評価を下したのは、紫上が貴官の「いと、おもしろかに、はかばかしき人にて、あやまちなかめ」ることを論難したのと共通する発想であり、光源氏と紫上とは一致して男を冷ややかに拒絶する一方の女に好意的ではないのだ。

男にだまされ男の言いなりになるほどの可憐さ従順さを女性の理想的条件として力説する源氏物語から、女性自立の思想や男性社会に対する真向からの批判を期待するのは、とだいの無理であろう。ついでに言い添えておけば、それらの女性観はほとんど作中の男性によって主張されているのを理由に、作者紫式部の思想がそれと必ずしも一致するとは限らないなどと弁じ立てない方がよいであろう。これまで見てきたように、物語中最大の理想的女性紫上の考えもそれらと重複し符合するところが少なくないというだけでなく、紫式部日記における、たとえば、

さまようすべて人はおいらかに、すこし心掟てのどかに落ち居ぬるを本としてこそ、ゆゑもよしもをかしく心やすけれ。もしは、色めかしくあだあだしけれど、本性の人がら辭なくかたはらのため見えにくきさませずだになりぬれば、憎うは待るまじ。

といった女房の心性論は、「夕顔」巻の光源氏が示した女性観とその根底において相通じているからである。

八

紫式部日記の寛弘五年十一月二十二日の新嘗祭当日の記事に、

下仕の中にいと顔すぐれたる、扇とるとて、六位の藏人どもよるに、心と投げやりたるこそ、やさしきものから、

あまり女にはあらぬかと思ゆれ。

という一節がある。童女御覧の行事に参加した下仕の女房が六位の藏人に扇を投げ与えたのを女らしくないと受けとめているのである。ここでも、紫式部は「女」としてふさわしいか否かという規準をもってその行為を評価しているのが分明である。彼女は「女」としての枠組をけっしておろそかにしてはいない。この場合の「女」の条件は慎み深さという自己制御の姿勢であらう。

同じ日記の冒頭で、中宮彰子に対して、「憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし」と、物語の理想的人物にほどこすような讃辞を与えたのは、^⑩「悩ましうおはしますすべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へる御ありさま」という、妊娠九個月の身重の苦しさを女房たちに気づかわせないように耐えている、その抑制の姿態になによりも強く心打たれたからにはかならないであらう。

和泉式部や清少納言にかなり手厳しい批評をつきつけた紫式部が、赤染衛門の詠歌について、「それこそはずかしき口つきに侍れ」と宣揚したのも、一つには彼女が左大臣道長家の大先輩女房であることによるが、それよりも赤染が、「ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌をよみ出で、えもいはぬよしばみごととしても、われかしこに思ひたる人」といった軽率で世間知らずな自己顕示型の人間ではなく、「まことにゆゑゆゑしく、歌よみてよろづのことにつけてよみちらさ」ない重厚で節度をわきまえた自己謙抑の姿勢を身につけた歌人であったことに由来すると考えられる。

紫式部が、とくに女性では、自分の才能や特技をふりかざし自己を強く押し出す人間に対していつも嫌悪に近い感情をいだき、てひどい侮蔑と嘲罵をすらあびせ、いっばうたとえ豊かな才能素養を備えていてもそれをひけらかさない謙虚堅実な態度、表立つことなく慎みを忘れない行蔵に強く好感を示し賞讃を惜しまないのは疑いの余地

がない。

しかしながら、紫式部日記においても、慎みや遠慮が度を越した消極的閉鎖的に過ぎる態度や処し方に対しては、厳しく批判的である。女房月旦のなかに、自分自身で物事が判断できないかのように遠慮勝ちで弱々しい小少将の君に対して、「あまりに見ぐるしきまで兎めい給へり」、「あまりうしろめたげなる」とする批判も見られるが、また中宮彰子に仕える女房に向けられた批判は大いに注意される。

中宮が、「色めかしきをば、いとあはあはし」と考え、「あまり物づつみせさせ給へる御心」であるのに馴れきつて、上臈や中臈の女房は、「うち兎めいたる人のむすめ」のままで、とかく世間から、「埋もれたり」と言われるほど、引込み思案で物恥して、「情なくひき入りたる」状態であることについて、強く反省を求めている。

こうした遠慮がすぎて退嬰的自閉的になったことを難じる表現は、そのまま「螢」巻・「夕霧」巻における発育不全の幼児性や消極的態度に対する批判的評言に一致するのであるけれど、さらに刮目すべきは、女房の出処進退に関して結論的に次のような認識を披瀝している点である。

かならず、人のたちより、はかなきいらへをせむからに、にくい言をひき出でむぞあやしき。いとようさでもありぬべきことなり。これを、人の心ありがたしといふに侍るめり。などか必ずしも、面憎くひき入りたむがかしこからむ。人などて、ひたたけてさまよひさし出づべきぞ。よきほどに、をりをりのありさまにしたがひて、用ゐむことのいと難きなるべし。

宮廷女房の殿上人に應對する心得を醇々と説き聞かせている趣きの文章であるが、「これを、人の心ありがたしとはいふに侍るめり」とあるにより、紫式部がこれまでもしばしば指摘し主張してきたことを、あらためて具体的状況に即してわかりやすく示そうとしているのが読みとれる。

人前にしゃしゃり出て無思慮な振舞いをするのといつても仏頂面で引きこもっているという、一方にかたよった

否定例を挙げながら、「よきほどに、をりをりのありさまにしたがひて用ゐむこと」——中庸と柔軟性の大切さを示そうとする、論の展開方法から論旨にいたるまで、「螢」巻や「夕霧」巻の女性論と符節を合わせている。とりわけ、その前の叙述以来退嬰の状態におちいった女性への批判が厳しく、かつまた傍線で示したようなほとんど合致する洞察や表現を有する点において、「夕霧」巻のそれときわだった照応関係にあると言えよう。

このことにより、あるいは「夕霧」巻と紫式部日記の消息的部分との執筆時期は近接していたのではないかと推定されるのであるが、ともあれ、以上述べきったところにより、「夕霧」巻の紫上の想念は、雨夜の品定め、延長上にあり、「螢」巻の女性論と大きく重複して、また紫式部日記消息的部分に示された女房の情操論と緊密であるのが明確であろう。それらに共通するのは、「わが心ながらも」あるいは「人の心ありがたし」という微妙な人間の心の認識のもとに、「よきほど」つまり中庸適度を重視する思想である。

「夕霧」巻の紫上の述懐は、けっして女性を抑圧する時代と社会に向けられた抗議などではなく、過度の自抑によって消極的態度におちいりがちな女性に向けて、「よきほど」を保つ困難さと重要性を自覚して、その叙知を柔軟に働かせることを説いた、紫式部その人の見解の表明である。

なお、「帚木」巻で色好みたちによる品定めを聞き入る光源氏が、「これに、足らず、又、さし過ぎたることなく、物し給ひけるかな」(一一八六)と、藤壺女御に恋心をつのらせるのを描いているけれど、これによっても、作者が理想とする女性はずなによりも、過不及のない中庸の精神の所有者でなければならなかったのが窺知できる。十分にその具体相が形象されたと言いがたい藤壺女御に対して、紫上については、「人を消たず、身をもやむごとなく、心にくくもてなし添へ給へる事」(三〇二)、「至らぬ事なく、すべて、何事につけても、もどかしく、ただたどしきことまじらず、ありがたき人の御有様」(三五六・三五七)、「人により、事に従ひ、いとよく、二筋に、心づかひはし給ひけれ」(三六二)等々と、ことに「若菜」以後、いたるところで、彼女が多くの美質を兼ね備え、

それらを臨機に機動せしめた、順応性に富み調和のとれた女人として、ほとんど徹底的と言えるほど、その理想性を追求したと言えよう。⁽¹⁾

(1) 拙稿「紫上の晩年(下)——女性哀史的発想を排す——」(「青山学院女子短期大学紀要」昭48・11)。

(2) 清水好子氏「源氏の女君」(「塙新書」九九頁)。

(3) 深沢三千男氏「紫の上——悲劇的理想像の形成——」(「国語国文」昭40・4、「源氏物語の形成」所収、二二二・二三二頁)。

(4) 秋山虔氏「源氏物語」(「岩波新書」一六三頁)。

(5) 末摘花は醜貌のほかに、精神の柔軟性の欠如から生じた無言・内気・古風などの否定的属性を兼ねそなえ、女三宮は遠慮がすぎた引込み思案ではないけれど、發育不良の未熟兒的人物で、「物の心を知らず、言ふかひなき者」と言え、「後めたき」女の典型である。

(6) 拙稿「平安朝女性の教育と教養——紫上の場合を中心に——」(拙著「源氏物語の理想的女性」所収)。

(7) 拙稿「光源氏の変貌——『野分』の巻を支点とした源氏物語試論——」(「青山学院女子短期大学紀要」昭42・11)。

(8) 「帯木」巻雨夜の品定め条下にも、「みる人、おくれたる方をば言ひかくし、さてもありぬべき方をばつくるひで、まねび出だすに、それ、しかあらじと、そらに、いかがはと推しはかり、思ひくたさん。まことかと、見もてゆくに、見劣りせぬやうは、なくなんあるべき」(一一五八)と、誇大な吹聴と現実の差による「見劣り」があげつらわれている。「螢」巻の女性論との密接な関係を示している。

(9) 細井貞雄「空物語玉琴」、五十嵐力氏「平安朝文学史」、片寄正義氏「宇津保物語と源氏物語の関係」(「国学院雑誌」昭16・2)ほか。

(10) 拙稿「中宮彰子評について——紫式部日記の物語的賞讃の方法——」(「平安文学研究」昭52・11)。

(11) 拙稿「紫上の晩年(上)(中)(下)——女性哀史的発想を排す——」(「青山学院女子短期大学紀要」昭46、47、48)、拙著「源氏物語の理想的女性」(昭51)。

【付記】源氏物語の本文は日本古典文学大系に拠り、その巻数と頁数を示すが、第三巻の「三」はこれを略す。

